

# 記憶をつなぐ人たち

## 東日本大震災から3年 特集・風化を防ぐ



社協復興支援愛センター内に張り出された被災写真。  
楽しかった震災前の思い出が詰まっている

わが町に大津波と紅蓮くれないの炎が襲い掛かった未曾有の東日本大震災から間もなくまる3年。昨年暮れまでに町内の全地区で復興整備事業が着工するなど、着実に再建の槌音が響く一方、被災体験やその記憶が徐々に風化していくことが懸念されています。そんな中、この町には当時の記憶をとどめ、後世の教訓にしようとする懸命に活動している人たちがいます。「記憶をつなぐ」  
——彼ら・彼女らの姿を追ってみると、図らずも今の町が抱える課題やこれから進むべき道も浮き彫りになりました。

### “思い出”を洗う

#### 山田町社協

東日本大震災の津波と火災が大きな爪痕を残した後、町内の至る所から人々の思い出が詰まった大量の写真やアルバムが見つかりました。その数、およそ20万枚。山田町社会福祉協議会（社協）は震災後間もないころから、海水や土砂で汚損した写真を洗浄し、持ち主に返す活動を地道に続けてきました。3年間で全体の4割ほどが戻っていて、今後は洗い終わった写真をデジタル化して蓄積し、東京

の大学生が開発中のタブレット端末用のアプリも活用して返却を進めていく考えです。

社協復興支援愛センター（ポランティアセンター）が入居する旧県立山田病院（八幡町）の3階に足を踏み入れると、廊下の壁一面や室内に張り出された数々の写真に迎えられます。持ち主の分からない「被災写真」を掲げる「思い出写真展」と名付けられたスペースです。結婚式や旅行の際に家族で撮った記念写真、学校や町内行事のスナップ、あどけない赤ちゃんのポートレート……。ところどこ



る表面がはがれて見えづらいものも多いですが、写り込んだ人物は皆、弾けるような笑顔。にぎやかな歓声まで聞こえてきます。

これらは町に集まった全国のボランティアや社協の職員たちがきれいに洗った後に乾かし、整理したものです。震災直後、町内のがれき撤去に伴って見つけた思い出の品や写真は、当時27カ所あった避難所などにいったん集められた後、社協のボランティアセンターや町のシルバー人材センターに持ち込まれました。震災2カ月後の5月から写真の洗浄作業を始め、翌年1月までに2回の写真展を開催するなどして返却に努めてき



被災者の“思い出”をやさしく洗う

ました。その後は写真展を常設にしなが、仮設住宅の全戸訪問や移動カフェなど被災者と触れ合うさまざまな機会に写真の持ち主を探し、これまでに7万2千枚余りが戻っています。被災写真は今も寄せられ、平成25年度だけでも依頼のあった2200枚を洗浄しています。

## 一枚でも多く返さなければ

「人の姿をこすり落とさないように気を付けながら……」。社協の写真洗浄の作業室で、復興推進支援員の佐藤紀子さん(46)がバットに張ったぬるま湯に写真を浸し、表面をはげでやさしく拭いていきます。津波にさらわれたフィルム写真のプリントは海水中などのバクテリアやカビが表面のゼラチン質を侵し、濡れたまま放置しておくとも劣化が進んで色素が流れ出てしまします。洗浄によってバクテリアに侵された部分をはがれることもありますが、それ以上、侵食が進むのを食い止められます。飯岡出身の佐藤さんは「顔見知りの写真を見つけて連絡すると、本人が震災で亡くなっていたこともしばしば。一枚でも多く返したい」と作業に励みます。

不思議な縁で、愛娘の写真を再び手にした人がいます。川向町で建具店を営む田老邦光さん(55)、智恵子さん(54)夫妻。田老さんは中心街を襲った大津波と火災で自宅兼工場と家財・仕事道具の一切を失いました。

夫妻の元に、東京で暮らす次女の恵子さん(27)が写った写真ではと、社協復興推進支援員の山下慶子さん(27)が訪ねてきたのは今年1月初めのこと。サード判の写真の中には、仙台大学(宮城県柴田町)に在学中、ポーター部員としてレースで仲間と共に力強くオールをこぐ恵子さんの姿がありました。

## まさか写真が戻るなんて……

「写真は1枚も出てこない」と諦めていたのに」と夫妻は喜びます。山下さんは1年前まで愛媛県宇和島市に住んでおり、山田町と直接の縁はありませんでした。しかし、出身の法政大学でポーター部に所属、強豪が集まる全日本選手権などで恵子さんを知っていたのです。

一方、デジタル技術を利用した写真返却の試みも。洗浄した写真をスキヤナーで読み込んで保存し、データベース化。東京工業大学の有志学生らが開発に



戻ってきた娘の写真を手に喜ぶ田老さん夫妻

取り組むタブレット端末用のアプリでデータベースを共有し、閲覧者が写っている人物や場所に分類用のタグ(目印)を付けて範疇ごとに整理、探したい写真の検索を容易にします。

開発のきっかけは、同大が震災の年に始めた、山田町と宮城県名取市閑上地区の被災写真を預かって学内で洗浄するボランティア活動。アプリ開発者の一人で同大理学部化学科4年の金相殿さん(23)は「スライドショーの機能を加え、写真を見た人たちの間で自然に会話が生まれれば」と期待しています。山下さんは総務省の復興支援員制度に基づく県の「いわて復興応援隊」に応募、昨年4月か



被災写真の返却に取り組む復興推進支援員の(左から)木村さん、佐藤さん、山下さん

ら社協に勤務しています。宇和島市では地方銀行の行員でしたが、被災した大学時代の友人たちを含め「今まで色々な人にしてもらったことを恩返しするチャンス」だと、山田行きを決めました。被災写真に寄せる思いをこう語ります。

「持ち主に写真を返すと涙を流して喜んでくれるし、写真を介して町民の皆さんとつながられる。今はつらくて昔の写真を見られない人が、いつか見たくなった日のためにできるだけのことをしていきたい」

同じく復興推進支援員で静岡県牧之原市出身の木村公介さん

社協復興支え愛センターの阿部寛之所長(36)は山田町の人口が1万7千人を割り、超高齢化している現状を踏まえた上で、震災から3年後の町が抱える課題や展望を次のように語ります。

「これまで気張りながら突っ走ってきた方々にそろそろ疲れが見えます。仮設住宅での生活

## 次代の担い手育成が急務

「普段の会話に仮設住宅や放射能の話が出てきたり、初めて会った子が急に抱き付いてきたりする。元気なのに発散する場所がない。遊べていないし、コミュニケーションも図れていないのでは」

(23)は、震災の翌年に初めて山田町をボランティアで訪れた時、最初にした作業が写真洗浄、ただだけに思い入れがあります。

「被災地に来て感じるのには正解や答えがないということ。できれば写真を見たくないという声などを聞くと、どういう形で返却したり保管したりするのがいいのかという悩みはあります」と心情を打ち明けます。

町内のミニバスケットボールの指導者でもある木村さんは、震災が子どもたちの心身に及ぼす影響が気になります。

「普段の会話に仮設住宅や放射能の話が出てきたり、初めて会った子が急に抱き付いてきたりする。元気なのに発散する場所がない。遊べていないし、コミュニケーションも図れていないのでは」

## 被災地を語る

### 新生やまだ商店街協同組合

がまだしばらく続きそうなこともあり、住民の皆さんを何らかの活動に巻き込んでいくことも考えねば。安心して暮らせる魅力的な町づくりのために、安定雇用や福祉サービスの充実と共に、次代の担い手を育成することが重要です」

●社協復興支え愛センター  
(☎7713262)

※思い出写真展は火曜から土曜の午前9時～午後5時



東京の団体に被災地の現状を伝える椎屋さん(左端)

被災した商店主ら23人が、復興を目指す町に新たな商店街を建設するために一昨年夏に結成した「新生やまだ商店街協同組合」。メンバーたちが全国から訪れる人々に自らの被災体験やありのままの町の姿を伝えようと「震災語り部」の活動を始めたのは、昨年1月のことです。

組合理事長で、写真店を営む昆尚人さん(39)は「今は『被災ガイド』だが、いつか『復興ガイド』に。前を向いて生きる町民の現在を知ってほしい」と言葉に力を込めます。

「水の供給が途絶え、火災は3日間も続きました。焼け野原とはまさにこのことです」。2月4日、町内を見渡す役場の駐車場で「被災ガイド」を務める同組合事務局長の椎屋百代さん(39)が、津波の後の猛火で焦土と化した中心街の写真を掲げながら、東京から来た若手経営者や管理職の約20人の団体に震災直後の町の惨状を語り聞かせていました。

一行はこの後、椎屋さんの案内でいまだに荒涼とした風景の広がる町中を歩き、震災当時、避難場所になった高台の御蔵山に移動。震災の記憶をとどめるモニUMENTである、大津波が押し寄せたとみられる時刻で止





犠牲者を悼む観音像の前に立つ清水住職

## 龍昌寺に慰霊の観音像

まったくままのJR陸中山田駅の大時計や、犠牲者を悼む「鎮魂と希望の鐘」の前で3年前の大災害に思いをはせました。

参加者の一人、一般社団法人不動産協会（東京都千代田区）事務局長の保母普武さん（41）は「3年経って、東京では報道のトーンも落ちてきている。現地からの発信が必要だと感じた」と感想を話しました。

椎屋さんは3年前、当時の勤務先だった山田町観光協会の観光案内所のある「道の駅やまだ」で被災。そのまま3日間留まり、職員らと協力して避難してきた

後楽町の曹洞宗龍昌寺の境内に今年1月11日、東日本大震災の犠牲者を慰霊する青銅製の聖観音像が建立されました。「記憶を風化させないためには拝まれるものでなければ」。震災で250人以上の檀信徒を亡くした清水誠勝住職（70）の強い思いが込められています。

津波は比較的高台にある同寺の山門まで及び、境内の山田町第一保育所の1階部分が浸水。関係する社会福祉法人や町が運営（当時）する二つの保育園を含め、当日休んでいた園児や保育

士ら6人が自宅などで犠牲になりました。清水住職はその翌月からこれまでずっと月命日の法要を営んでいます。「供養は残された者の使命。僧侶である前に人間としてやらねばと思った」

観音像をまつる六角堂には、曹洞宗を開いた道元禪師の著書「正法眼蔵」から引用した「鎮常」の文字を記した額を掲げました。常に心安らか、という意味。「お寺から遠い仮設住宅の檀家も毎日お参りしてくれる。拜んで心の回復をしてほしい」と言います。

●新生やまだ商店街協同組合  
（☎77-3732）

## いつかは「復興ガイド」に

この1年間で、語り部たちの話に全国ののべ2200人が耳を傾けました。

「震災当時、内陸から遠く離れた山田の情報はほかの市町村に比べてマスメディアに載りに

近隣住民に炊き出しなどの支援を行いました。「語り部をしながら、私たちが当時の体験や助け合いの気持ちを忘れないようにしたい。心も一緒に風化してしまわないように」

この町で生まれ育ち、9年前に写真店を開業した昆さんは、語り部を始めた動機をこう話します。

語り部役の組合員はほとんどが中心街に構えていた店舗や自宅が全壊するなどの被害に遭いました。震災から3年を経て昆さんが心配するのはやはり、体験や記憶の風化。「津波の教訓を生かし、被害を最小限に食い止めるために、どうすべきなの



報道されなかった町の真実を語りたいという昆さん

か考えねば。物はお金で買えますが、自分や家族の命は買えません」と言います。

昆さんは今後、語り部の活動をどのように続けていこうとし